
魔法先生ボーボボ

ハジケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ポポポ

【Nコード】

N4257Y

【作者名】

ハジケ

【あらすじ】

これは魔法先生ネギまの世界に転生した一人の転生者と仲間たちのハジケ物語

プロローグ（前書き）

初めての小説です。弟の携帯借りて書いています。もしかしたら弟も小説書くかもしれません。

プロローグ

「んっ？ここは…？」「気がついた？」

「おまえ誰？」

「私は女神様…そしてあなたは死んだの。」

「ふーん…それで？」 「えっそれでっ、ふっーおどろくのに

…まあいいわあなたを転生させてあげる…さあほしい力をいいなさい。」 「ハジケリストにして。」

「えっええええええ！なんでハジケリストふっうもっとかっこいい力えらぶよね！」

「ハジケリストにしてくれたらほかいらねーんだよっとしろブス。」 「ちよっブスって…もうあんたじゃっかんハジケてない…まあいいわしかしこのハジケという力は神々でも手にあまるわ…でもふっうえらばないけどね転生者…まっいいわ、ほい！」

「んっ何か変わったの？」

「まっきっかけ与えただけだからねあとはあんたしだ…」

「鼻毛真拳奥義マリネージエ！」

「うぎゃあああああ！」

「おっでた。」

「ふっういきなりやる!？」

「うるせー!!」「ええー!!!？」

「でっどこ転生すんの？」

「魔法先生ネギまの世界だけど。」

「へえー何ソレ？」

「知んねえのかよ!！」

「よし…行くかっとそのまえにブス頼みあんだけど。」

「えっ何？」

「ボーボボたちとクロスできね？」

「まあできないことないと思うけど…。」

「じゃボーボボとヘツポコ丸とビユティとソフトンと首領。パツチと破天荒とついでに天の助と田楽とガ王。」

「ついでって…OKわかったよ…じゃ先にあなたをネギまの世界へ…」

「いってきまーす。」

ピヨーンと何か空いてた穴に飛び込む転生者

「えーかってにいつちやったよもう完全にハジケてるよ!!」

プロローグ（後書き）

小説書くのって疲れますねでも面白いです。
続きがんばって書こうと思います。

俺か…そうだな俺は（前書き）

明かされる転生者の名前！ その名は…

俺か…そうだな俺は

ネギまの世界…

「秘密を知られたからには記憶をけさせていただきます!」

「ええっ」

今魔法先生ネギまの主人公ネギがアスナの記憶を消そうとしていた

「ちょっとパーになるかもですか許してくださいね」

「ギャーちょっと待ってーっパーッて!?!」

「消えろーっ」

「キヤーー」

パシユウウツ

しかし消えたのは記憶じゃなくて服だった

「あ・・あれ」

「いやーッ」

「いやーー露出狂よ!」

急に現れた転生者

「あっあなたは誰ですか!？」

急に現れた転生者にそう問いかけるネギ…そして転生者は答える

「俺か…そうだな俺は破路毛道タカオだ!！」

「変わった名前ですね…」

「今考えたしな。」

「今考えたの!？」

「ねえ見てあの子露出してるわよこんな所で。」

「変態じゃない本当いやよねー」

「まったくねよねー」

「あんたらも誰!？」

急に現れた三人組に対してそう言うアスナ

「俺はボボボーボボーボボだ。」

「俺は首領パッチだ。」

「俺はところ天の助…所で君裸だねこのぬの服をあげよう。」

「裸より恥ずかしいわよ!！」

「ええ!!」

「確かにな」。

「うんうん。」

「ないよねあれ。」

「ひどい!」

「ここにいたボーボボ。」

「ビュティ。」

「また変なことしてたの。」

「いや今回はこいつがしてる。」

そう言いアスナを指さす

「別にしてないわよ!!」

「えっでもお前裸じゃん。」

「あっ」

「本当だ」

「こっこれは違うのよ」

「犯人はみんなそう言うぜ？」

「何の犯人よ！」

「露出狂の。」

「露出狂じゃないわよー!!」

などといいあっている時にタカオはあることに気づいた

「あれ…ボーボボ他の奴らは？」

「他の奴らか実は…」

「実は…？」

「女神の奴がやらかしゃがったんだ!!」

「一体何しやがったんだあのブス！」

「それはだな…」

回想…

「えーではみなさんにはネギまの世界にいつてもらいます。」

「おっしやーハジケてやるぜ！」

「その世界の主食をところてんにするぞ。」

「俺は魔法覚えようナントカパトローナムってやつ。」

「その魔法ネギまの世界ないんですけど…。」

「ハジケ組をその世界にも広めましょうオヤビン！」

「バビロン神の導きのままに…。」

「僕のかわいさその世界にも広げるのらー」

「マスコットの座はゆずらん。」

「僕が元祖なのらー。」

「俺の真拳他の世界だとちよつとな…。」

「そもそも私たち何するんだらうね。」

「私にもわかりません…えーとりあえずこの装置に乗ってください、みなさん。」

装置に乗るボーボボたち

「えーとスイッチは…あつ！へみゆ。」

転ける女神そしてスイッチやら何やら色々ある装置にぶつかると。

ブーブー

「何これやばいんじゃないのー!？」

「落ち着けみんな落ち着けー!!」

「そう言ってるボーボボが一番落ち着いてないよ!!?」

「ボーボボ、パチ美怖い!」

「うるせー!!」

グシャ!

「げぶっ!!」

「みなさんしゅみましえん。」

「女神次あったら覚えてるテーマー!!!!」

ブウウン!カッ!

回想終了…

「と言うわけなんだ。」

「あのブスへたこきやがってぶっ殺す!」

「俺も手伝おう。」

「サンキューボーボボ。」

「二人とも女神さんだって故意にやったわけじゃないんだから…。」

「故意じゃねーで済んだらポリスはいらねーんだよ！」

「そこは普通に警察つていえばいいでしょー！」

「何かギャーギャー騒いでるわねあいつら。。。」

「そうですね。」

「おーいその人達何やってるんだ？」

「あつ高畑先生。」

「アツ、アスナ君。」

「なんで驚いた顔してるんですか高畑先生…あつ。」

アスナはタカオたちが騒いでいるのを見て忘れていた自分が裸でいることをしかし今思いだしたようだ。

「ひっいつ…いやあ〜っ」

「いやあ〜見ないでえ〜」

首領パッチはアスナの真似をしたそしてこのあと…

「「死ね首領パッチ！！」」

「ぐぎぎあー！！！！」

となるのだった。

「これからどうすかったな。」

一人これからどうハジケけるか考えるタカオだった。

薬、大パニック！（前書き）

タカオ「今日もハジケてハジケまくるぜ！」

薬、大パニック！

チュンチュン チチチ…

「全くもーバイトも遅刻しちゃったしホントあんたなんか泊めんじやなかった。」

「えうつ僕のせいじゃ…。」

「仲悪いなー二人…んっあれ何や？」

木乃香の見た先にはハジケハウスと書かれた家があった。

「こんなの建ってなかったよね…。」

「そっやと思うけどな…。」

二人が会話してしているとハジケハウスから人が出てきた。

「んーいい朝だこんな日は牛乳とジュエルミートに限るな。」

タカオは牛乳とジュエルミートで朝を満喫していた。

「人住んでたよ！？てか昨日の奴！？」

「あのお肉おいしそーやな。」

「気にするとこそごじゃないでしょ…！」

「君たち遅刻するぞー。」
タカオがえらくまともなことをアスナたちに言った。

「あついけない急がなきゃ。」

アスナはそう言い走りだした。

「急がなきゃ！」

口にパンをくわえて制服を着た首領パッチも走って来た。

「やべっ、遅刻する。」

そこにボーボボも来て首領パッチとぶつかる。

「きゃあー！」

「ごっつ、ごめん大丈夫？」

「どこ見て…っ、かっ、かっこいい。」

「どっつした？」

「なっ、なんでもないわよ！」

「朝っばらから何やってんの二人とも！！」

二人の茶番劇を止めにビュティがやって来た。

「よくある学園恋愛ものの出会い。」

「それは分かるよ！恥ずかしいからハウスに戻って！！」
「はい。」

などと二人がばかやってる間に原作部分をちよつとはしよる。

「ふう　どーしょ」

カランコロンコロン・・・

「ん？」

ネギのリュックから何かが転げ落ちそれに気づくネギ。

「こ、これは・・・！？昔おじいちゃんがくれた『魔法の素丸薬七色セット（大人用）』・・・！？」

「へえー何ソレ？」

急に現れるタカオ。

「わっ！？」

「驚くなよ。」

「驚きますよ急に現れたら！」

「で・・・それで何すんだそれ食って今の僕は百倍強いとか言っの？」

「それ何の話ですか・・・これそういうのじゃないと思います。」

「じゃ、ちょっと一つくれ。」

そう言つて一つ丸薬をとるタカオ。

「あっ！」

「パクつゴクン・・・うおおおおお！！！！」

タカオは丸薬を飲んだするとタカオの背中から・・・チャクラでできた蛾の羽が生えてきた。

「ええ！？何か生えてきた！！？」

「今の僕は百一倍強い！！」

「何か中途半端ですね・・・。」

「そついやお前はそれで何しよーとしてたんだっけ？」

「それはこれでホレ薬を作つてアスナさんにあげようと・・・でもタカオさんが一つ使つちやたからうまくできるかどうか・・・。」

「仕方ないじゃあこれをやろう。」

そう言つてタカオは一つの丸薬っぽいものをネギに渡した。

「これは？」

「たぶん材料の代わりになる丸薬。」

「たぶんって・・・でも仕方ないこれを使おう。」

ホレ薬を作るのに取り掛かるネギ。

「ラス・テル・マ・スキルマギステル、アゲナスカートウルポテイ
オアモーリス!!!」

「ナントカカントカパトローナム!!!」

ポボンツ。

「で・・・できたみたいだ!!!」

「おっ、やったじゃん。」

「これを飲めば人間はおろかあらゆる異性におそらくモテモテに・・・
アスナさんきつと喜ぶぞ!!!」

「やべ、丸薬の副作用が・・・。」

チヨウジみたいに木にもたれて倒れるタカオそして...

中等部二年A組・・・

「アスナさん、アスナさん。」

「・・・たま来たわねネギ坊主。」

色々あってイライラしてるアスナ。

「何の用よ。」

「実はできたんですよアレが!!」

「アレ?」

「ホレ薬ですホレ薬。たぐん」

薬をもらわずにアスナは歩きさるつした。

「あ待ってください!本当に効くんですよー。」

「いらないうって言ったでしょ……ったく。」

「本当なんです!ダメされたと思ってちょっとだけでも……。」

「あんたが飲みなさいよ」

「はもごっ、ごっくん。」

ネギに無理矢理薬を飲ませるアスナ。

「間違えてパンツ消しちゃうよーな奴の作ったモノ飲むわけないで
しょ。」

「ゴポ、ゴポツ。」

「……。」

「ゲホ、コホツ、あうえー。」

「ホラなんにも起こんないじゃない。」

「あれ……おかしーなー。」

「何のつもりか知らないけどねそんなことじゃキゲン直さないわよ、フンッ。」

「や、やっぱりそうですよねゴメンナサイ……。」

「アスナ、うちちょっと百鬼夜行を作ってくるわー。」

「え！？何急に变なこと言ってるの木乃香！！？」

「だってうちぬらりひよんの孫やもん。」

「ぬらりひよん！？学園長先生のこと言ってるのあの人それぼっいけどぬらりひよんじゃないわよ！！！」

「さー作るえうちの百鬼夜行。」

「て……聞いてないし！！！」

「この世をネギ先生を中心としたシヨタによるシヨタの世界にしますわー！」

「委員長も变なこと言い出したー！！！！？」

「ニンジンソードー！」

「ならこっちはナスビブレイカーー！」

「み、皆さんどうしたんでしょうか。」

「もしかしてあなたの薬の影響じゃ……。」

「え、そうなんですか!？」

「それ以外に考えられないでしょうが!！」

「おっ、何かハジケてんな。」

「あなたは、破路毛道さん!」

「あんなんでここにいんのよ!！」

「そりゃハジケを感じたからだ。」

「ハジケ!？」

「そうハジケだ。」

「ハジケって何ですか？」

「まあ簡単に言うなら説明のつかないものだ。」

「結局分からないんじゃない……。」

「あのもしかして破路毛道さんからもらったあの丸薬……。」

「あーあれかあれ飲んだ本人のまわりをハジケさせたくする鼻くそだったわ。」

「え、鼻くそ!？」

「汚いわね・・・。」

「でもそれなら何でアスナさんはハジケてないんだろ?。」

「それはそいつがツッコミリストとして目覚めているからだ。」

「ツッコミリスト!？」

「ボケを成立させるのに必要なツッコミをする奴らのことだ。」

「私、そんなのになつてたの・・・。」

「た、確かにアスナさんするどいツッコミしてたかも・・・。」

「してないわよ!。」

「パントマイムパントマイム。」

「あんたは急に何やってんのよ!?!」

「それだあ!そうそのツッコミ。」

「あ、つい反射的に・・・。」

「あの破路毛道さんどうすればハジケた人たちを戻せますか。」

「簡単だ気絶させればいい。」

「それだけ!？」

「うんそれだけ。」

「じゃあ早く気絶させないと。。。」

「こつなつたのには俺にも原因がある手伝おう。」

「驚いたわ・・・あんたそんな奴に見えなかったのに意外に責任もつタイプなのね。」

「俺式真拳奥義『魔王には効かない役立たずのザラキ』!」

タカオをがその奥義を放つた瞬間倒れていく生徒とネギ。

「ちょっと、あんたそれ死の呪文でしょ!」

「大丈夫だちゃんとみんな生きている・・・たぶん。」

「たぶんで何よお!!」

アスナはすぐにみんなの脈をはかった生きていた・・・ただ一人を除いて。

「ねえ・・・ネギの脈ないんだけど。」

「何!じゃあ早く棺桶に入れないと!」

「あんたふざけてる場合じゃないでしょ!!ネギ、死んじゃったの

よ!」

「わかったじゃあドラゴンボール七つ集めてくる。」

「だからふざけんなって言うてんのよ!!!」

「アスナさん怖い！わかりましたよ、俺式真拳奥義『物語上死んだ人には使えないザオリク』！」

光がネギを包む。

「本当に生き返ったの……？」

「あれ？僕は一体？」

「ネギ！」

ネギに抱きつくアスナ。

「ア、アスナさん？」

「よかった……本当によかった。」

「ど、どうしたんですか一体？」

「いやーよかった、よかったこれにて一件落着。」

「じゃ……ないわよ。」

「えっ？」

鬼神のようなオーラを漂わせたアスナがタカオに近づいていく。

「もとはといえばあんたのせいでこんなことに……。」

「いやそいつが薬作ろうとしたのも原因だと……。」

「ちょっと反省しなさい!!!」

タカオを思いつきりぶつとばすアスナ。

「ぎゃああああああああああああ!!!」

「あ、あのアスナさん機嫌は……。」

「あ、それもういいわよ。」

「え、あ……ありがとうございます。」

アスナはタカオのせいで機嫌が悪かったことはどうでもよくなってたのだった。

薬、大パニック！（後書き）

タカオ「いやーネギ先生、生きててよかったねー。」

アスナ「のんきに言うんじゃないわよー一体誰のせいで危なかったと思うの。」

タカオ「次回もハジケるからよろしくな！」

アスナ「ちよつと無視すんじゃないわよ！」

作者「次回もどうか見てください。」

バラモスって一人で倒すところ褒美がもらえる(前書き)

タカオ「ドラクエ3って名作だよな。」

バラモスって一人で倒すところ褒美がもらえる

「ここまで来れたのはバカレンジャーの皆さんの運動能力のためです。」

バカレンジャーと呼ばれる彼女ら（アスナ・まき絵・クーフエイ・長瀬楓・綾瀬夕映）とネギは頭がよくなる魔法の本を探しに来ていた

「おめでとです。さあこの上に目的の本がありますよ。」

ゴゴ・・・ゴトンッ

「あ・・・へっ!？」

「よく来たな勇者たちよ二度と復活出来ぬようにハラワタを食らいつくしてくれるわ。」

アスナの見た先にはバラモスの格好をしたタカオがいた。

「何やってんのよあんた!」

「バラモスの真似。」

「みりゃわかるわよ!!--」

「じゃあ聞くなよ。」

「・・・じゃあ質問を変えるわ、何であんたがここにいるの。」

「ボスがいそうな場所さがしてたらここにたどり着いた。」

「そんな理由!?!」

「そう、そんな理由。」

「魔王バラモス覚悟!」

ボーボボが現れた当然格好はドラクエ3の勇者の格好だ。

「来たな勇者ボーボボよ、たった一人で向かってくるとはいい度胸だ。」

「一人じゃない!仲間ならいるぜ!棺桶の中にな!」

「勇者なのに仲間を守れてないの!?!?」

「ここにくるまでの敵が強くてな……。」

回想……

「ボーボボもうHPがヤバい回復魔法を……」

「うるせー!MPがもったいねーだろ!」

「ボーボボ、毒解除してくれ!」

「断る!」

回想終了

「て、わけだ。」

「それあんたの責任でしょうが!!」

「おいしいツツコミだ今日はビュティがストレスからきた風で休みだから頑張ってくれ。」

「なんでよ!!というかその風あんたらが原因じゃない!!」

「え?なんで?」

「自覚なしかよー!!」

「あのーアスナさん。」

「何よネギ。」

「僕ら魔法の本を探しにきたんじゃないんですか?」

「そうだった・・・こんなバカ達に構ってる場合じゃないんだった。」

「魔法の本?それっぽいのならあそこにあるぜ。」

「あっ・・・あれは!?!」

「ど、どうしたのネギ!?!」

「あれは伝説の・・・」

「さとりの書だ！」

「えっ、まじでじゃあ、あれで賢者なれんの。」

ネギの言葉を遮りドラクエ3のさとりの書とポーボボが言いタカオはそれに反応した。

「いや・・・あれメルキセデクの書なんですけど・・・。」

「いやメルクの星屑は本じゃねーだろ。」

「メルキセデクの書よ！あんたちゃんと聞いてた!？」

「えっ、何？」

「ねえ思いつきり殴っていい？」

「あれなら確かにちよつと頭を良くするくらいカンタンかも・・・。」

「本当！ネギ！」

「あのアスナさんこの人達は・・・。」

「ああこいつらただのバカだから気にしないでいいわよ。」

「そうですか・・・。」

「それよりもあの本で最下位脱出よ!！」

「やったー!!！」

「一番ノリア

ルー。」

「あーあたしもー。」

「あ、みんな待って!!」

バカレンジャーに呼びかけるネギ。

「あんな貴重な魔法書絶対ワナがあるに決まっています気をつけて!!」

ガコン!

「えっ。」

「キヤー!」

「いたー!」

「わあ。」

「いたた・・・え・・・な、何コレ・・・。」

ワナにかかったバカレンジャーとネギと木乃香。

「コレって・・・?」

「ツ・・・ツイスターゲーム・・・?」

ブウ・・・ンゴゴゴ...

「フオフオフオ・・・」

ズズウ・・・ン

「この本が欲しくば・・・わしの質問に答えるのじゃーフオフオフオ」

「あいつフオフオフオてバルタンかよ。」

「いやあれゴーレムです。」

「バルタンみたいな言葉使いつて意味でバルタンかよって言ったんだよ！人の揚げ足とるみたいに言っつてんじゃねー！！」

「えええ！」

「ーでは第一問『デファイカルトDIFFICULT』日本語訳は？」

「ええー！？」

「何ソレー！？」

「み、みんな落ち着いて！！大丈夫！ちゃんと問題に答えればワナは解けるハズ！」

みんなを落ち着つかせるために言葉を発するネギ。

「落ち着いて『DIFFICULT』の訳をツイスターゲームの要領で踏むんです。」

「ええーそんなコト言っても。」

「『デイ、デイフィコロト』って何だっけ先生ーッ。」

「教えたら失格じゃぞ。」

「いつ・・EASYイージーの反対ですよっ！えと『簡単じゃない』！！」

「『む』」

「そうそうー！！」

「『ず』」

「『い』ね。」

「『難しい』正解じゃ。」

「や・・やった。」

「キヤーこれで本GETだねー。」

・
しかし問題は一問で終わらずこのあとも続いていった。そして・・・

「最後の問題じゃ。」

「やった最後だって」

「『^{ディッシュ}DISSH』の日本語訳は？」

「えっ……ディッシュ……。」

「ホラ食べるやつ！食器の……。」

「メインディッシュとかゆーやるー。」

「そうかわかったぜ！」

なぜかここでタカオが反応した。

「『ト』」

「『リ』」

「『コ』」

「『ぬ』！」

タカオ達はトリコとやりたかったようだが天の助がよけいな『ぬ』を入れた。

「バツキャロー！天の助でめーのせいで間違えたじゃねえか！！」

「何やってんだこのバカ！！」

「ぶっ殺すぞ！！」

「だって『ぬ』を入れたかったんだもん。」

「このバカー！」

バキイ！

「げふう！」

「て、バカはてめーら全員じゃあ！！！」

キレルアスナ・・・まあ確かにその通りである。

「ハズレじゃなフオフオフオ。」

「こんのバカどものせいでー！！！」

バカアツ　ゴオオオオオ

落ちていく全員。

「いざ行かんアレフガルド！！！」

「打倒ゾーマ！」

「俺のハジケでやってやるぜ！」

「この秘剣ぬの剣でぶったぎってやるぜ！」

「こんな時までぶざけんなー！！！」

その頃ビュティは・・・

「くしゅんー！うう寒いみんなあんまりにおかしいことやってないといけど・・・。」

しかし当然それは無理でした。

バラモスって一人で倒すとこ褒美がもらえる(後書き)

タカオ「いよいよゾーマと激闘か！」

アスナ「ふざたこと言ってる場合ー!!」

ポーポボ「装備は万端だぜ！」

首領パッチ「俺のハジケで圧倒してやるぜー！」

天の助「ぬの剣の切れ味見せてやるー！」

アスナ「お前らいい加減にしるー!!!!」

ゾーマってめっちゃくちゃ威厳のある大魔王だよね（前書き）

タカオ「ゾーマって威厳半端ねーよな。」

ゾーマってめっちゃくちゃ威厳のある大魔王だよな

図書館島最深部

「うーん・・・」

「う・・・」

「あれ・・・？」

「・・・そ、そうだ僕たち、英単語のトラップを間違えてゴーレムに落とされちゃったんだ・・・。」

「てかあのバカどものせいだけだね。」

そう言いアスナはタカオ達をにらめつける。

「チートスうめー。」

「・・・本当におもいきりアイツ殴りたいわ。」

「それよりアスナさんここはどこでしょうか？」

「アレフガルド大陸だろ。」

「ちょっとあんた黙ってくれる！」

「まてタカオ。」

「なんだボーボボ。」

「アレフガルド大陸にしては明るいぞ。」

「まさかもうゾーマは倒されたのか!?!?」

「そもそもゾーマなんていないわよ!?!」

「……ここは『幻の地底図書館』!?!」

「何! 幻の大地だと!?!」

「ねえ本当、黙ってくんない。」

「地底図書館って何や夕映?」

「地底なのにあたかいかい光に満ちて数々の貴重品にあふれた、本好きにとってはまさに楽園という幻の図書館……。」

「へー図書館にしては広いけど。」

「ただしこの図書館を見て生きて帰った者はいないとか。」

「そりゃゾーマ倒したらギアガの大穴閉じるもんな。」

「黙っててって言ったわよね?」

「アスナさん怖い!」

「・・・とにかく脱出困難であることは確かです。」

「ど、どうするアルか？それでは明後日の期末テストまでに帰れないアルよ。」

「それどころか私たちこのままおうち帰れないんじゃないか・・・？あの石像みたいなのもまた出るかもだし。」

「み、皆さん落ち着いてー（で、でもこの場所は・・・？）」

「痛ッ・・・。」

「アスナさん!？」

「いや、大丈夫何でもないよ。」

「か、肩をケガしたんですか!？さっき落ちた時に・・・!？」

「大丈夫かアスナほれ回復薬だ。」

そう言いタカオはアスナにワサビを渡した。

「こんなので治るわけないでしょ!！」

「ええー!！」

なぜかすごく驚くタカオ

「（よ、よーしあまり得意じゃないけど治癒魔法で・・・）ラス・テルマ・スキル・・・（ハッ・・・しまった・・・僕、三日間魔法を封印

して今はただの人なんだっけ……」

「いいから試してみるよー効くってコレ。」

「ワサビなんか効くわけないでしょー!」

「ちえっ!」

「だ、だめですねやはりどこからも登れないようです。」

「ルーラでとべば?」

「本当にアンタは……まてよアンタへんな技使えたわよねそれで……」

「残念ながらルーラは薬もらってないからムリ。」

「ドラクエ5かよ!?!てかこのやくたたず!」

「み、皆さん元気を出してくださいっ根拠はないけどきつとすぐに帰れますよっ、あきらめないで期末に向けて勉強しましょう。」

「えゝ勉強ヤダー。」

「俺も。」

「私ヤツ君とデートだし……」

「俺はところてんの勉強ならいい。」

「アンタらは関係ないでしょ！」

「と、とにかくがんばりましょう。」

「そうだね・・・ネギ君。」

「幸いなことに教科書には困らないようですし・・・。」

「よしじゃあ早速授業を・・・。」

ぐぎゅるっ

「・・・と、その前に、食料探しだーっ。」

「俺、ガララワニ捕獲してくる！」

「じゃあ俺、リーガルマンモス！」

タカオとポーボボもないと思われる食料を探しにいった。

「あー待ってください僕もーん・・・あつ、」

パシュウッ

「一つ目の封印が解けた・・・朝日とともに解けるから・・・
今は土曜の朝か、ここに来てから一日経ったんだ・・・あと二日・・・。」

「

「千年は生きてそんなガララワニ捕まえたぜー！」

「うわっ!?!何、あのワニ!?!?デカッ!?!」

「俺は、お恥ずかしい事にリーガルマンモスの子どももしか捕まえられなかった。」

「そのサイズで子どもなの!?!?」

「というか、この地底図書館あんな生物いたんですか……。」

翌日……(テストまであと一日。)

「では、これわかる人!。」

「ハイ!ハイ!ハイ!」

「えっと確か……首領パッチさんでしたよね。」

「答はコカ・コーラゼロです!」

「ええ!?!」

「バツキャローここはペプシコーラだろ!」

「このバカ首領パッチが!?!」

「お前ら三人ともバカじゃ!?!」

「まったく……この劣等生どもが……こんな答もわからないのか？ 答は『ぬ』だよ。」

それを聞いたタカ才は天の助の腹を拳でぶち抜いた。

「んなわけねーだろ……この劣等生が。」

「が、がふつ。」

「言っとくけどアンタも十分劣等生よ。」

「皆さんちよつと休憩にしましょう。」

ネギはみんなに休憩の指示を出した。

「（ふーむ……ずっと水に浸ってたハズの本がまったく痛んでないし……この無秩序な本棚の並び……誰がこんなモノ作ったんだろ？）」

ネギはなんかしらべてた。

「お……腕の封印の二本目が消えてる……あと一本か……明日の朝になれば魔法で外に帰れるぞ……ん……。」

キヤツキヤツウフフ

「えっ。」

「キヤー！！ネギ先生のエッチ！！」

ネギが見たさきには水浴びをしている首領パッチがいた。

「もうやだんゝネギ先生。」

「首領パッチく。」

ポーボボが走ってきた、そして・・・

「死ね！首領パッチ！！」

ドガア！！

「げぶう！」

当然こうなるさらに・・・

「追加でふつとべ首領パッチ！！」

バゴオ！！

「うぎゃあああああ！！！！」

タカオが首領パッチに追撃を加えた。

「イエイ！！！！」

互いにハイタッチするタカオとポーボボ。

「相変わらずだこの人達・・・。」

「あつ、ネギ。」

「あ、アスナさん。」

「このバカどもに変なことされてない？大丈夫？」

「だ、大丈夫です。」

「聞き捨てならねーなアスナ、俺がいつネギに変なことした。」

「一回殺したわよね……。」

「あつ、ボーボボあつちにロトの剣があつたぞ！」

「まじで！……いこいこ……！」

「話そらして逃げたわね……。」

「あの……アスナさん……。」

「あのさネギ……。ーこんな所に連れて来ちゃってゴメン……。実は期末で最下位だったからクラス解散の上私たち小学生からやり直しだっていうから……関係ないアンタを巻き込んだね。」

「……は？」

「いや、だから私たちが留年って……。」

「いや、僕がクビになるってことしか聞いてないですけど……。」

「……………」

「……………」

「え、え〜何よ、それえ！……てことは留年とか小学生ってのは……デマ！？」

「た、たぶん……」

「あーもうっそんなんだったらこんな謎の図書館なんか来なかったわよ。」

「ええっ！？そんなあー。」

「ったくも〜やっぱりあんたが来てからふんだりけったりよ。」

「ぼ、僕だってそうですよ。」

「キャーッ！」

「ん。」

「何ですか！？」

「とにかく行くわよ、ネギ！」

「わ、分かりました！」

「あつ。」

「誰か助けてーッ、ネギ君、アスナ〜。」

「ま、またあのでかいの!？」

「動く石像ゴレムですよっアスナさん!一緒に落ちてたんだ!」

「フオフオフオ・・・フオツ?」

ドゴン!

「フオーー!!」

「ゴーレムに何かぶつかった!？」

「あれ、タカオじゃない!?あ・・・でもアイツぶつかったおかげでまきちゃんが助かったわ。」

「ぐっ、やっぱり強いぜ。」

「フオ・・・。」

「みんな、あの石像の首の所を見るで・・・。」

ゴオオオオ!!

「へっ?」

「フォ！？・・・フォーー！！！」

突如巨大な火の玉が石像にぶつかった。

「あつ！本が燃えた！！」

「てか何！？あの火の玉！！？」

「ありやゾーマのメラゾーマだ。」

「ゾーマなんているわけ・・・」

「闇の世界で眠るがよい。」

「・・・いたあああああ！！！！」

「どりゃー！ぬの剣！！」
プルン。

「・・・メラゾーマ。」

「ぐおー！！！！焼き焦げるっっっ！！！！」

「くらえ！！首領パッチソード！！」

「ふん。」

ゾーマは軽く腕を振るった。

「ぎゃあー！！」

「くられえ！ロトの剣！！」
「スパン！」

「ぐっ。」

ゾーマにかなり効いたようだ！！

「いくぜ俺式真拳奥義！！破壊の風を二度巻き起こすHHHンピン」
「！！」

「そこは普通はやぶさの剣でしょ！！！！？」

「ぐおおー！！！！」

しかしめちゃくちゃ効いた。

「うそー！！！！？」

「続けて俺式真拳奥義『タンスの角に小指ぶつける』！！」

「いやそれぜったい効かないよ！！」

しかし・・・

「ウグアアアアア！！」

今までの攻撃のなかで一番効いた。

「何か変なのばかり効いてない！？」

「やってくれたな・・・ジゴスパーク。」

「これはヤバイ!!」

「タカオ！友情の力で防ぐぞ!!」

「わかった!!」

「友情ガード!!」

二人はそう言っつて首領パッチと天の助を盾にした。

「アババババツ!!」

「友情ひとかけらもね!!」

「ゾーマア!!よくも俺たちの仲間を!!」

「許さねえ!!」

「確かに攻撃してきたのゾーマだけど盾にしたアンタらのがどう考
えても悪いわ!!」

「憎むがいいそれが我が糧となる・・・。」

「あれ・・・何か、ゾーマ全部自分のせいみたいにしよつとしてない
・・・器デカツ!!」

「ボーボボ!こうなつたら合体技だ!!」

「わかった!！」

「マヒャド!！」

「メラゾーマ!！」

「まさか……。」

「合体奥義『メドロア』!！」

「やっぱり!！」

「グアアアアア!！」

ズーン……

「やった倒しぞー!！」

「これでアレフガルドは救われる!！」

「でも何であのゾーマ、闇の衣纏ってなかったんだ?」

「そう言えば……。」

「そついやバトルロードビクトリーってゲームじゃゾーマ倒したあとに闇の衣纏った真ゾーマってのが現れるんだよな。」

「そう言えばそうだったけ。」

「「「「あつ!！」!！」!！」

ゴゴゴゴゴゴ！

「第二ラウンドといこうか。」

「復活したー！しかも闇の衣纏ってるー！」

「首領パッチ！光の玉だ！！」

「分かってるぜ！ボーボボ……えーと……コレだ！あつ。」

ツルツガシャン！

「よくも光の玉わつたなー！！天の助ー！！」

「えっ！？俺ですか！！？」

バゴォ！

「ひどいー！！」

「クソ……どうすれば……。」

「しかたないSPカード光の玉を使うか。」

「その手があつたか！！」

「そんなんでいけるの！！？」

「くらえ！ゾーマー！」

ゾーマの闇の衣がはがれていく。

「行けたアアああああ!!」

「そして俺の切り札で終わらせる!!俺式真拳奥義『ドラクエ5のバグ技ででる妙に強いボロンゴ召喚』!!」

バグ技ボロンゴがでてきたそしてゾーマに攻撃をくわえる。

「ウツグアアアアアアアアアアアア!!!!」

「よっしゃあ!!」

「一撃!!!!?」

「やったなタカオ!!」

「おまえスゲーじゃねーか。」

「ぬのハンカチあげる。」

「いるかそんなん。」

「ええ!!」

「と、とりあえずゾーマは倒しされたのね。」

「よーし帰るか。」

「へっ・・・アンタ・・・ルーラ使えねーとかいってたわよねっ帰るのよ。」

「リリリリあんじちゃん。」

「……そう言えばそうね……てか使えるならさっさと言えー！
「……」

「じびぢああああああああ！……」

このあと地底図書室から無事脱出したアスナたちだった。

ゾーマってめちゃくちゃ威厳のある大魔王だよな（後書き）

タカオ「うおー！次回もハジケるぜ！！」

ボロボロ「俺もだー！！」

首領パッチ「俺だって負けねー！！」

天の助「この世界の主食をとろてんにする！！」

タカオ「んなの無理にきまつてんだろぅが！！」

バキイー！

天の助「おぶう！」

アスナ「こんな小説だけど次回も見えてね。」

鼻毛祭りゝでも調理が大変だな。

パッチキングゝもつと簡単なのにしたら？

ぬの人ゝぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ。

「なんだこいつら荒らしか!？」

ちうファンH I R Oゝおいてめえらちうタンのチャット荒らしてん
じゃねえ!!

女神転生ハジケゝ簡単なのか・・・じゃあ金色イクラは？

鼻毛祭りゝそれなら調理しなくてもいいな。

パッチキングゝいいチョイスじゃねーか。

ぬの人ゝぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ。
ぬぬ。

ちうファンH I R Oゝおい無視すんな!!

女神転生ハジケゝうるせーなぶつとばすぞ!!

ちうファンH I R Oゝやれるもんならやってみやがれ!

女神転生ハジケゝわかった。

鼻毛祭り>確かにそうだな。

パッチキング>てことは北斗の拳での悪人の見極めかたはケンシロウの目つきだな。

女神転生八ジケ>確かにそうだ！

「くそつ、なんなんだこの荒らしどもは。」

女神転生八ジケ>ドラクエ4ってさ、ピサロチートだよな。

鼻毛祭り>確かにアイツいたらクリフトいらねーもんな。

パッチキング>もともとクリフトいらねーんじゃないの？

女神転生八ジケ>確かにそうだ(笑)

鼻毛祭り>役たたずザラキマンだしな。

「なんだこいつら、そんなにクリフトのことが嫌いなのか!?!」

女神転生八ジケ>っーか実際ブライとトルネコもいらねー。

鼻毛祭り>トルネコは不思議のダンジョンシリーズじゃ勇者の剣と盾装備できて強いのにな。

パッチキング>商売ごと以外じゃ本気だしたくねーんじゃないの？

女神転生八ジケ>世界を救う旅じゃ本気ださずか・・・サイテーだ

な。

「最低なのはお前ら荒らしじゃ!!」

女神転生八ジケ>それにしても今度の遊戯王の主人公はさん付けにあたいしねーな。

鼻毛祭り>そうだな前作の主人公たちにくらべると全く威厳がない。

パッチキング>俺、アイツのサインは欲しくねーな。

「遊馬はあとで本人自体もチートっぽくなるわ!!」

女神転生八ジケ>最近ヴァンガードってカードゲームがやってるよな。

鼻毛祭り>確かにアレ伸びてきてるな。

パッチキング>アニメの主人公は權って奴だっけ？

女神転生八ジケ>そうそう。

「ちっげーよ！先導アイチだよ！・・・確かにあいつ主人公っぽくないけど・・。」

女神転生八ジケ>そういや、めだかボックスでさ安心院の奴が言った、そのようになりたいと思われる主人公の中にボーボボいなかったぜ。

鼻毛祭り>なにー!?なぜだ・・ボーボボがないんだ!!

パッチキング>外道だからだろ。

鼻毛祭り>ぶつ殺すぞ!!

「なんかわけわかんねーこといいはじめたなこいつら……。」

鼻毛祭り>ちよっと、安心院殺してくる!!

女神転生ハジケ>まで！殺すのは人吉が成長しきってからしてくれ！安心院も一応、関わってるから……人吉の成長楽しみなんだ！！

鼻毛祭り>それもそうだな……よし殺すのは人吉成長しきってからだ。

「とりあえず殺すのは確定なのか!?!」

女神転生ハジケ>それにしても荒らしもあきてきたな！。

鼻毛祭り>そうだな！。

パッチキング>そろそろヤツ君とデートしなきゃ。

女神転生ハジケ>じゃ、そろそろログアウトするか。

鼻毛祭り>そうしよう。

パッチキング>ヤツ君まってね。

荒らし撃退ポリス>キミタチ荒らしダメ連行。

女神転生八ジケ>なんだ捕まえる気か？やれるもんならやってみやがれー！！

鼻毛祭り>そうだそうだ！

パッチキング>ヤツ君とのデートがあるから捕まるわけにわいかないわー！！

女神転生八ジケ

鼻毛祭り

パッチキング

ログアウトしました。

「連行されたあああああああ！！てか荒らし撃退ポリスさっさと来いやー！！！！」

その後・・・女神転生八ジケたちの行方を知るものは誰もいなかった・・・。

荒らしはやめよう！（後書き）

女神転生八ジケ 破路毛道タカオ

鼻毛祭り ボボボーボ・ボーボボ

パッチキング 首領パッチ

ぬの人 ところ天の助

荒らし撃退ポリス ????

不思議のダンジョンは理不尽だらけ（前書き）

作者「オリジナル話です！」

不思議のダンジョンは理不尽だらけ

コンコン。

「ん？誰かしら？」

ガチャ。

「おいアスナ、春休みだな遊ぼうぜ。」

アスナが玄関を開けた先にいたのはタカオだった。

ガチャン。

「おい、急に閉めんな。」

「春休みになってまで、アンタなんかと関わりたくないのよ！」

「なんでだよー遊ぼうぜー。」

「嫌よ！」

「鍵、開けるよー。」

「はいはい今、開けまーす。」

ポーポボが鍵を開けた。

「て……いつからアンタいたの！？てか……アンタ、不法侵入

者！！」

「えっ、不法侵入者だって！？どこにいるんだ！？」

「アンタよ！！」

「俺は不法侵入者じゃない！窓からどうどうと入ってきた！！」

「なるほど窓からどうどうとね……それってやっぱ不法侵入者じゃない！！」

「えー。」

「えー、じゃないわよ！！」

「まあまあ、そう怒らないで……とりあえず遊びに行こうじゃないか。」

「そうだな、タカオ。」

「だからアンタらと遊ばないって言うてるでしょ！！それに遊ぶならアンタらの仲間のプルンプルンした奴とオレンジ色のトゲトゲした奴と遊べばいいじゃない！！」

「あいつらは事情があって遊べねーよ。」

「事情？」

「それはだな……。」

回想・・・

「シューティングスタードラゴンでダイレクトアタック！シューティングミラーシュ！」

「うわぁ！負けた・・・やるじゃねーかタカオ、楽しいデュエルだったぜ。」

「さて首領パッチ、罰ゲームをつけてもらおうか。」

「ええ！？そんなの聞いてねーぞ！！？」

「いや、あつちでもやってるし。」

「天の助！死の体感だ！！」

「うぎゃあああああ！！」

「んじゃ、こつちもやるか。」

「お、おい待てタカオ！？」

「マインドクラッシュ！」

「ぎゃー！！！！！！」

回想終了・・・

「て……わけだ。」

「たかがカードゲームで恐ろしい罰ゲームをすんな!! てか、アンタらのせいじゃない!!」

「まあ、それはともかく遊ぼうぜ、ネギも呼んでこいよ。」

「嫌よ! どうせまたアンタネギをやばい目にあわせるんだから!」

「おいタカオ、ネギ捕まえたぜこつなったらネギだけ連れてこつぜ。」

「そうだな。」

「アスナさーん!」

「わかった私も行くわよ!」

「よし、じゃあ行くぜ! 不思議のダンジョンにな!」

「え……不思議のダンジョン?」

不思議のダンジョン入り口。

「マジであつたの……!?!」

「さあ入ろう。」

「どんな宝があつかな。」

「まっ、待ちなさいよ!」

不思議のダンジョン一階

「まずは装備探しだな。」

「どうせ一階だから、ろくなのないわよ」

「おい秘剣カブラステギ手に入れた!」

「何で一階からそんなのあんのよ!」

「あのモンスターが落とした。」

「あのモンスターって・・・あれ・・・?あれって・・・。」

風来のシレンの主人公のシレンが倒れていた。

「モンスターじゃないじゃない!?!?」

「えー、違うの?」

「あれ風来のシレンの主人公のシレンじゃないのよ!?!」

「まあでもカブラステギ手に入ったし別にいいや。」

「アンタ・・・最低ね。」

「にしてもこのモンスター消えねーな。」

「だからモンスターじゃないって……。」

「これ投げてみっか。」

タカオはシレンに向かってジェノサイドの巻物を投げたシレンの存在がダンジョンから消えた。

「アンタあああああ！何やってんのおおおおおお！シレン存在消えちゃったじゃない！！！」

「さて、次の階目指そうぜ。」

「シレンの消滅はスルーなの！！？」

「むみゆうー！」

「わっ、何ですかこれ！？」

「こいつは、あなぐらマムルだな。」

「むみゆうー！」

バシッバシッ

「何か攻撃してきたんですけど！？」

「そりゃモンスターだもん……あと、あんま攻撃をくらってっとならなげ。」

「えっ!？」

ネギHP5

「うわっ、本当だ!？」

「むみゅー!」

バシッ

「うわっ、助けてくださいタカオさん!」

「……。」

「何ポーっと見てんのよ!助けなさいよ!」

「いや、ネギ倒してレベルアップしたあなぐらマムルの進化系どうくつマムル倒して一気にレベルアップしようと思って。」

「何、考えてんのよアンタ!」

「だって弱い仲間ってそのためにいるんじゃないね?」

「その弱い仲間ってリクのことか……リクのことか……!」

「助けてー!」

「ハッ!?ネギ!今、助けるわ!」

バシッ!

「むみゆ！」

あなぐらマムルを倒した。

「助かりましたアスナさん。」

「礼を言われるほどのことはしてないわよ。」

「あと少しでどうくつマムルになったのに……。」

「黙れ！腐れ外道！」

「おーい階段見つけたぞ。」

「何本当かポーボボ！さっそく次の階だ！」

「さっさとダンジョンから出たい……。」

不思議のダンジョン二階

「何よ……これ。」

ドラゴンハウスだ！

「絶望的じゃなあああああい……！」

「大丈夫だ俺はドラゴンを倒す術をもっている！」

「それ本当！？」

「本当だ・・・いくぜ！火竜の鉄拳！」

ゴォー！ドカン！

「ギャオオオ！」

「それフェアリーテイルのナツの滅竜魔法じゃなああああー！」

「やるなタカオならこっちは鉄竜剣！」

ザンツ！

「グギャアアア！」

「それがジルのおおおおおー！」

「タカオさんとポーボボさんって魔法使えたの！？」

「ネギ、気にするところじゃないわ！」

このあとタカオとポーボボは滅竜魔法でドラゴンたちを全滅させた。

「んじゃ、次いこーぜ。」

そう言いタカオは歩きだしたが・・・

カチツ！

「へ？」

ドガン!!

「地雷のワナ!?!」

爆発で起きたケムリがはれるとタカオはヤムチャが栽培マンにやられた時のポーズになっていた。

「爆発だからってヤムチャの格好になってるんじゃないわよ!?!」

「何を言う!爆発といえばヤムチャのポーズだ!?!」

「あー皆さん階段見つけました。」

「何??ネギ少しは役にたつじゃねーか。」

「さっさと進んでこんなダンジョンおさらばしたいわ!」

不思議のダンジョン三階

「ここ初期ダンジョンだからそろそろ終わりかな。」

「二階でドラゴンハウスで初期ダンジョンなの!?!」

「ポーポボ・・・締めであれいこうぜ。」

「ああ・・・泥棒だな!」

「やる気まんまんで何、言ってるの!?!」

「さあ店探すぞ!」

「ちよっ、待ちなさい!」

ダンジョン内、店

「いらっしゃ……」

ガン!

店主は倒れた。

「さあ品物かつさらってくぜ!」

「いきなり何、店主殺ってんのおおおお!?!?」

「いい品ばつかだな。」

「よし全部拾ったし、店内に作った落とし穴のワナで脱出だ!」

「キミタチ泥棒ダメ!」

「おっ、お前は……荒らし撃退ポリス!?!」

「今八泥棒撃退ポリスだよ。」

「さっさと落とし穴で逃げるぞタカオ!」

「ソウハ、サセナイ界王拳百倍!!」

ギャン! ドカツバキツ!

「うぎゃああああ!!」

「ぐあああああ!!」

「界王拳使ったー!? あのポリス何者!？」

「キミたち八泥棒シテナイミタイダカラコノ持子帰りノ巻物デカエリナサイ。」

「あつ、ありがとうございます。」

「サテ、コイツラ連行シナイト。。。」

「ネギ・・・帰ろう。」

「はい。。。。。」

今回の冒険の記録

タカオとポーボボ、不思議のダンジョン三階にて泥棒撃退ポリスに連行される。

不思議のダンジョンは理不尽だらけ（後書き）

アスナ「あのポリス何者なのかしら・・・」

作者「今後もちよくちよくでるかも！」

首領パッチ「んなことより作者！俺の出番増やせ！」

天の助「俺のもだ！」

作者「考えておきますから落ち着いて。」

タカオ「次回もハジケっから見てくださいな！」

アスナ「こんな小説だけどよろしくお願いします！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4257y/>

魔法先生ボーボボ

2011年11月21日20時05分発行